

胃の疾患（胃ポリープ・慢性胃炎・胃ガン術後）に対する可視総合光線療法

一般財団法人光線研究所
研究員 柿沼 規之
所長 医学博士 黒田 一明

家事や育児、仕事、介護、それらを取り巻く人間関係など、ストレスの多い社会環境では、「胃が痛くなった」「胃に不快感がある」など、胃に何らかの不調を感じ、あるいは自覚症状が無くても健康診断などで胃の疾患を指摘されることがあります。

■ 可視総合光線療法

可視総合光線療法の光と熱エネルギーは、温熱効果により血行状態を改善し、内分泌系や自律神経系など各生理機能を調節することで、消化管の働きや全身状態を整え胃の蠕動運動を促し、胃液（胃酸と消化酵素）と胃粘液（胃粘膜の防御因子）の分泌バランスを整え、消化吸収能力を良好にします。抗炎症作用により胃の痛みなどの不快な症状を改善、予防します。またガン術後の場合体内で産生されるビタミンDが免疫力強化に寄与し、体力回復や再発予防も期待できます。

今回は、胃ポリープ、慢性胃炎、胃ガン術後について解説します。各疾患とも病院での検査、治療を受けながら光線治療を併用することが基本となります。

■ 胃ポリープの光線治療

胃ポリープは、胃粘膜の一部が異常増殖し、胃腔内にできた突出物です。胃ポリープは、基本的に良性疾患ですが、まれに悪性の場合もあるので、見つかった時は定期的な検査が必要です。胃ポリープの原因ははっきりと分かりませんが、年齢を重ねるほど増加傾向にあり、50歳以上では約10人に一人の割合で見られると言われています。光線治療で、消化管の環境が改善されることにより、胃ポリープの進行抑制や縮小、消失の効果が期待できます。

◆治療用カーボン

3001-5000番、3001-4008番、1000-3001番を使用。

◆照射部位

【両足裏部⑦、両膝部②】集光器使用せず各5～10分間、【背正中部⑳】1号集光器使用10分間照射。経過や症状により、【上腹部⑪】1号集光器、または2号集光器使用で追加照射。なお⑪の照射が不快な場合は、⑪の照射を中止する。

■ 治療例 胃ポリープ・高血圧 65歳 女性 153cm 45kg

◆症状の経過

50歳時人間ドックで胃ポリープを指摘された。自覚症状はなく、治療の必要はないと言われたが大きくなるか不安になっていたところ、親戚に光線治療を勧められ、親戚からアドバイスされた方法で光線治療を開始。治療用カーボン1000-3001番で背正中部⑳のみ10～20分間を毎日照射。1日2回照射する日もあった。翌年の検査で胃ポリープは消失していて驚いた。その後1年間光線治療をしなかったが、52歳時、胃ポリープの再発と血圧（140/80）が少し高いことを指摘され、治療法確認のため、当附属診療所を受診した。

◆治療用カーボン

1000-3001番を使用。

◆照射部位

【両足裏部⑦、両膝部②、両足首部①】集光器使用せず、【上腹部⑪、背正中部⑳】1号集光器使用で各10分間照射。

◆治療の経過

光線治療により以前からあった足の冷えが緩和し、熟睡できて風邪を引かず体調はとても良好であった。その後、毎年人間ドックで経過をみているが、「胃ポリープは大きくならず心配はない」と言われ安定している。13年後の現在、血圧は130/80を維持し降圧剤を服用せずに済んでいる。光線療法は体調の維持と胃ポリープ、血圧の安定のため継続している。

■慢性胃炎の光線治療

慢性胃炎は加齢変化が原因といわれていたが、近年ヘリコバクターピロリ菌感染により起こることが明らかになってきました。胃粘膜に慢性的な炎症があると、胃の痛みや不快感、食欲不振、吐き気などの症状が出る場合があります。また慢性胃炎は単に胃の働きを低下させるだけではなく、炎症状態が継続すると、動脈硬化が促進され、血管が詰まりやすくなるなど全身の様々な病気に繋がるということが指摘されています。慢性胃炎が長く続くと胃の粘膜が萎縮して「萎縮性胃炎」となり、さらに進行すると前ガン病変になると言われています。2009年日本ヘリコバクター学会は「ピロリ菌感染者はすべて除菌を行うべき」と発表しています。ピロリ菌の除菌は抗生物質の服用が必要不可欠になりますが、光線治療併用で抗生物質の副作用軽減、慢性胃炎の改善に有用となります。

◆治療用カーボン

3001-5000番、3001-4008番、1000-3001番、1000-4001番を使用。

◆照射部位

【両足裏部⑦、両膝部②、腹部⑤、腰部⑥】集光器使用せず5～10分間、【背正中部⑳】1号集光器使用10分間照射、【後頭部③】1号集光器使用し5～10分間適宜照射を追加。経過や症状により、上腹部⑪を追加照射。⑪の照射が不快な場合は⑪を中止する。

■治療例 慢性胃炎・胃潰瘍・両膝痛 56歳 女性 公務員 150cm 43kg

◆症状の経過

40歳頃から、左右の変形性膝関節症を患い、52歳時に同僚の紹介で当附属診療所を受診し月1～3回の通院治療を開始した。53歳頃から時々、慢性胃炎によるみぞおちや背中に痛みを感じたが痛みは暫くすると治まった。仕事が忙しくなったため、当所への通院治療が4カ月間空いた。その時受けた人間ドックで貧血（Hb8.8 g/dl）を指摘され、胃痛の頻度が増え、1カ月後に内視鏡検査を受け胃潰瘍が見つかった。ピロリ菌陽性のため除菌治療をすることになり、除菌治療までの胃痛改善と体力回復、そして除菌治療の経過を良くするために当附属診療所への通院を再開した。

◆治療用カーボン

3001-4008番を使用

◆照射部位

4台の治療器で、

1回目：両足裏部⑦、両膝部②、膝裏部、腰部⑥各10分間の照射。

2回目：両膝部②、膝裏部、上腹部⑪、背正中部⑳各10分間の照射。

3回目：左右膝1号集光器使用、両足裏部⑦各10分間の照射。

◆治療の経過

除菌治療開始までの約1カ月間、光線治療をすると胃痛は数日で落ち着いた。除菌治療中、特に副作用は出ず除菌は成功し、2カ月後には貧血もなくなり（Hb11g/dl）、胃潰瘍は改善した。以後胃痛は治まり、食事も美味しく、明るい気分で過ごせるようになった。正座はまだできないが以前より膝は曲げやすく、ズキッとした痛みも出ず、運動も問題なくできる状態にあり助かっている。

■ 治療例 ピロリ菌除菌の副作用改善 76歳 女性 主婦 150cm 48kg

6年前から慢性胃炎で胃薬を服用していた。かかりつけの病院でピロリ菌検査を受けたところ陽性で、しかもピロリ菌数が通常よりも多いと言われ除菌治療を開始した。しかし初日の服用後、薬の副作用でひどい下痢になり、1週間服薬を続けることは難しいと思い、以前乳ガン術後の治療で効果的だった光線治療を思い出して光線治療を行った。治療用カーボン3001-4008番を使用し⑦②⑥⑳各5～10分間、腹部⑤を30分間照射したところ、下痢は治まり、その後も下痢になることはなく除菌治療は無事終了し除菌も成功した。胃炎は落ち着いて元気に過ごしている。

■ 胃ガン術後の光線治療

国立がん研究センターの統計では、胃ガンの罹患率、死亡率はともに40歳代後半から増加します。ガンで亡くなった人数を部位別に多い順に並べると、胃ガンは男女ともに第2位で、年間約5万人が亡くなっています。胃ガンは早期発見、早期治療により治る病気になりつつありますが、手術で胃を切除した場合、様々な後遺症に悩むことが少なくありません。鉄分やビタミンB12、カルシウム、ビタミンDの吸収力低下で「胃切除後貧血」「骨代謝障害」が起こりやすくなります。また、未消化の食物がそのまま腸に入ることによって腸の過剰な収縮などを招き、めまいや動悸、冷や汗などの症状がでる「ダンピング症候群」などの後遺症に悩むことも考えられます。

光線治療は消化管の働きをコントロールする自律神経を安定させ、血液循環を良好にして消化吸収力を向上させます。またビタミンD産生作用により、骨代謝障害を改善させ、胃がん術後の後遺症の改善に寄与します。また基礎体力や免疫力を強化することでガンの再発予防や抗ガン剤治療の副作用軽減への効果も期待出来ます。

◆治療用カーボン

1000-4008番、1000-3001番、1000-4001番を使用。

◆照射部位

⑦①②各5～10分間、⑤⑥③各5分間照射。⑳10分間。㉑の照射を適宜追加。

足の冷えが強い場合は、⑦①②の照射時間を延長したり、腓腹筋部29照射を5～10分間追加する。

■ 治療例 胃ガン術後 64歳 女性 主婦 155cm 43kg

◆症状の経過

57歳時、左脇腹痛で病院を受診し胃ガンと診断された。他の臓器への転移はなく開腹手術で胃3/4を切除した。術後から睡眠が浅く、胃痛や下痢気味となり、体調不良で困っていた。45歳時に子宮筋腫治療で光線治療がとても効果的だったのを思い出し、今回の体調不良にも効果があるのではないかと思い、当附属診療所を受診した。

◆光線治療

1000-4008番の治療用カーボンを使用し、⑦①②⑤⑥⑳③を照射。

⑦⑳各10分間、他は各5分間照射。

◆治療の経過

半年毎の病院検査を受けながら光線治療を自宅で毎日行った。光線治療を始めてから熟睡できるようになり、胃痛が徐々に軽減していった。1年後、食事は普通に3食とれるようになった。光線治療後は空腹感もあり、食事が美味しく感じ、消化も良い感じがした。2年後、胃痛や下痢はほとんど治まり、経過が良いので病院検査は1年毎でよいと言われた。途中光線治療を休んだ時は下痢が再発し、体重が4～5キロ減ったが、光線治療を再開し体重は1～2キロ戻り、術後7年経過した現在、検査で異常はなく体調良く過ごしている。